

歴史と地理の交差点

! 日常の交差点

まずは、日頃見ている景観からどういった歴史と地理が広がっていくのかについて、一つの例を取って紹介します。

図1・1を見てください。別に「ここはどこでしょう」というクイズをするつもりはありません。この場所は香川県高松市、高松駅近くの交差点です。高松市に行ったことのない人は、もちろん初めて見ると思いますが、日本の地方都市であればどこにでもありそうな風景ですし、それほど違和感はないと思います。

私にとっても、まったく特別なところはない普通の風景でした。実はこの交差点、私の高校時代の通学路にあったものなのですが、私は高校3年間（正確には浪人時代を含めた4年間）、何も意識することなく、この交差点を通っていました。この写真は2019年に撮影していますので、私の思い出の風景とは少し違っていています。とはいえ、もう高校時代の記憶



1-1 何気ない交差点の風景（筆者撮影）

もだいたい彼方に遠ざかっており、普段の通学路の風景などは正確に思い出せないくらい、色あせています。毎日通る当たり前の道だったからこそ、かもしれませぬ。皆さんのいつも通る場所にも、気にとめない普通の風景がたくさんあると思います。この写真は、そうした当たり前を切り取った1枚だと思っています。

ただ、そうして何気なく通っている場所も、本当はオンリーワンの特徴を持っています。どこにでもありそうですが、ここにはかない風景です。たとえば、この交差点、よく見ると少し変わっています。写真で奥に進む太い道が通学路だったので、その左側、ガソリンスタンドとの間に「細い道」があります。そのため、ここは一般的によく見られる十字路の交差点ではなく、変則



1-2 高松市中心部 (地理院地図 (淡色地図) を利用して作成)

! 歩く目線と地図の目線

的な五差路の交差点となっているのです。さあなぜ、この交差点は変則的なのでしょうか。「はあ?」と思う方もいるかもしれません。高校時代の私もそうでした。交差点が十字路でも三差路でも五差路でも、別にどうでもいいことです。それに疑問を持つこと自体、まったくありませんでした。道がそこにある、だから進むのだ。高校時代の私にとって、道や交差点は所与のものであり、考える対象ではなかったのです。

皆さんも普段の生活で通っている交差点を思い出してみてください。「なぜ、この交差点は十字路なんだろう」とか「なぜ、ここに交差点があるのだろう」といった疑問を持ちながら、交差点を歩いたことはありませんか。

こうした疑問は、もしかしたら日常生活に必要なものかもしれません。実際、そうした疑問を持たずにこれまで生きてこられたわけですから。しかし、一度こうした方向性への疑問に目覚めると、そこにはとても豊かな世界が現れます。日常生活の周りには知的好奇心を刺激する景色にあふれているのです。本書では、そうした疑問の持ち方や疑問の解き方のいくつかを紹介しようと思います。本当であれば、皆さんの身近な場所を事例にすればいいのだと思いますが、皆さん一人ひとりの身近な場所を訪ね歩くことは残念ながらできません。そのため、私の知っている事例をいくつか紹介していくなかで、皆さんの景観読解スキルを少しずつ上げていくお手伝いができればと思います。

さて、先ほどの交差点について、もう少し紹介することにしましょう。図1・2は国土地理院の作成している地理院地図から高松市中心部を示したものです。高松は戦国時代に生駒氏の作った城下町が直接のベースとなって展開している都市です。城下町時代に直行する整然とした街路整備がなされました。現在も市街地の交差点の多くは十字路となることが分かかります。そのなかで数少ない変則的な交差点、それが図1・1の写真の場所だということになります。さて、どこか分かるでしょうか。

地図の左上(北西)付近に「高松駅」という文字があります。その右下(南東)方向に「西内町」という町名が表記されていますが、その中間に比較的大きな交差点があると思



1-4 大正期の地図にみえる交差点『高松市新地図』
(駸々堂旅行案内内部、1923年刊)(所蔵:京都府立大学)

私の手元に大正12年(1923)に駸々堂旅行案内内部が刊行した『高松市新地図』という地図があります。その部分図を示します(図1・4)。マルで囲んでいる部分が、問題の交差点の位置なのですが、交差点の形が違っていています。ないのは私の通学路です。実は、通学路として使っていた道は戦後の都市計画のなかで生まれた道でした。あの交差点が変則的になったのは、戦後だったのです。城下町由来の都市だからといって、すべてが城下町時代に遡るわけではありません。

もう一つ、この図で気が付くのは、図1・1に写るガソリンスタンド横の「細い道」に朱線

しよう。

❗古い地図をたどる

では、この交差点の不思議の起源を訪ねるために、古い地図を確認してみることにしま



1-5 交差点と写真撮影の方向(地理院地図(淡色地図)を利用して作成)

います。そこが図1・1の交差点で、写真は交差点から南方向に撮影したものとなっています。「西内町」という文字に隠されてしまっていて見えにくくなっていますが、確かにそこが変則的になっていることが分かりますね。

やはり、少し「西内町」が邪魔なので、より詳細な地理院地図を載せることにします(図1・3)。写真の方向を矢印で示しています。矢印の先、南南西に向かう幅の広い道が私の通学路です。それに対してその横の南南東に向かう道が、図1・1で見たガソリンスタンド横の細い道です。

どうですか。何か気付くことはあるでしょうか。地図をよく見ると、細い道に並行する道がありますね。他の道とは方向が違ってきますし、きれいな並行となっているのですぐに目を引く不思議な道です。



1-5 享保年間の高松城下 (『享保年間高松城下図』(昭和期複写)) 所蔵:高松市歴史資料館

どうも近代の駅前開発に合わせてできた道路には見えません。東に折れてもなお並行していますのでとても奇妙です。そこで、もっと遡って城下町時代の地図を確認することにします。先に触れたように、高松城下町の基盤は戦国時代に生駒氏によって築かれました。17世紀中頃になると、藩主は松平氏へと変わりますが、松平氏も生駒氏時代の都市の骨格を維持して支配しました。

図1・5に示したのは、享保年間(18世紀前半)の高松城下町を描いた絵図を複写した図の一部です。海城である高松城の特徴や、整然と整備された街路の様子がよく分かります。さて、図1・1に示した写真を撮った場所がこの絵図の中に含まれているのですが、どこか分かり

が引かれていることです。この地図で朱線は電車軌道を意味しますので、この時代、あの道に電車が通っていたこととなります。高松で私鉄といえば「ことでん」(高松琴平電鉄)が有名です。現在の「ことでん」は高松築港駅から高松城跡を回り込んだ後に南下していくルートとなっています(図1・2参照)、戦前は築港から高松駅前を通過し、その前の通りを南下していくルートとなっていました。「細い道」と思っていたあの道は、往時、駅前の目抜き通りだったわけです。戦争中、空襲によって市街地が大きな被害を受け、私鉄路線も復旧困難となりました。戦後、戦災復興のための都市計画が実施され、いくつかの道路が敷設されるとともに、私鉄路線のルート変更が起きたのです。そのなかで大きく変化した場所の一つがああな交差点でした。

さて、図1・4を見ると「細い道」は、やはり周囲の道とは方向が違ってきます。高松駅に直交する形で延びているので、たとえば高松駅の敷設に合わせてこの道が開通したという予想を立てることが可能です。実際、日本各地の都市に、そうした事例をいくつも確認することができます。

ただし、それだと説明しにくい点があります。それは先ほど確認した「細い道」に並行する道の存在です。図1・4にも「細い道」の右(東)に並行する道が明確に描かれています。ですので、この2本の道の間を電車が通っていたわけではなく、あくまでも「細い道」の方に線路が敷設されていたこととなります。また、この並行する道路は途中で東に折れており、

コラム 6 四季のイメージ



簡単な頭の体操を。できれば複数名いたほうがいいので、周りにいる人を誘うところから始めましょう。そして集まったら、みんなで春・夏・秋・冬、この四つの季節の景色でぱつと連想できる単語を三つずつ書き出してみてください（あまり考え込まずに、思いついたものをさつと書くのがポイントです）。それができれば、結果をお互いに確認してみてください。すると、同じ単語を連想している場合もあれば、違っている場合もあると思います。そうした点を確認

できたら、なぜその単語を思いついたのか、少し話し合ってみましょう。この頭の体操は、私の授業でもよくこなうものです。なかにはとてもユニークな単語を連想する学生もいます。尋ねてみると、その季節に起きた印象的な出来事を思い出して、それを象徴する単語を連想した、といった答えが返ってきます。季節イメージが自身の経験と結びついて形成されていることがよく分かります。こうした経験に即した単語は、決して他の人とは一緒になりません。暗



6C-① 京都市高野川の桜 (2008年4月) (筆者撮影)



6C-② 沖縄県渡嘉敷島の桜 (2010年2月) (筆者撮影)